

明治初年、佐田介石の言論と社会経済論

五〇

梅林 誠爾

向井俊彦さんを偲んで、最近関心を持っている事柄について投稿します。向井さんは、学生時代私にとって尊敬する先輩でした。彼は、ハイデガーにも関心を寄せていたマルクス学徒で、その幅広い知見と鋭い問題洞察力によって、私はしばしば触発されてきました。また、卒業後も研究会や学会でお会いするたびに、「梅林くん、君は見田介石先生や鈴木茂先生の理論をどう継承するか、考えているか」などと、尻を叩かれていました。向井さんからのそうした叱咤激励もあり、見田先生の分析的方法、鈴木先生のア・プリアリに関する研究から学ぶことができました。お二人の研究は、西洋の近代哲学、現代の諸科学の状況を踏まえ、さらには西田哲学も一部視野に入れながら、マルクス理論の現代化を図ろうとするもので、その構想には感動をおぼえるほどです。

しかし、今の私は、向井さんの叱咤激励にまだお答えすることができません。何か疑問がわくとそれに関心を奪われてしまうという傾向があり、考える問題が移ろいがちであるという欠点を克服できないまま今日に至っています。そういうわけで、ここでは今私の関心を占めていること——日本近代思想の一局面——について、報告します。

はじめに

佐田介石は、幕末維新期の熊本出身の学僧である。文政元年（一八一

八）八代郡種山村（現八代市）の浄立寺に生まれ、十八から二十代半ばにかけ本願寺の大学林に学び、飽田郡小島町（現熊本市小島中町）正泉寺佐田氏の養子となつている。介石は、幕末明治初年という前近代から近代への激変の時代に、伝統を重んじながらも近代文明をめぐる諸問題と真剣に向き合い、活発な言論活動を行い、当時にあつては、西洋近代文明を強く退けた学僧として知られていた。仏教や中国上古の天文説に依りながら西洋近代天文学を批判し、江戸期の伝統的な生活文化を擁護する経済思想を唱え、舶来品排斥や護法の運動を展開した。また、言論の媒体・様式に注目すると、介石は建白書により維新政府に建言し、書籍や雑誌を東京や京都において発行し、また新聞雑誌に投稿し、そして演説を通して民衆に活発に語りかけている。

ここでは、介石の言論のうち主として社会経済論に関する主張とその言論媒体・様式に着目して、介石の言論が、必ずしも伝統回帰一辺倒ではなく、その時代状況に対応して、前近代と近代とを合わせ持つ過渡的性格のものであったことを見ることとする。その際、介石にとつても明治初年という時代状況にとつても、「近代」あるいは「文明」は、その後の日本が実際にたどった「近代」とは異なる要素を内包していた可能性があつたということにも注意してみたい。

ところで、介石は、その地方遊説の途中、明治十五年（一八八二）二月九日、越後高田に病没している。翌年四月、伝記『等象斎介石上人

略伝』が弟子の仁藤巨寛によって出版されている。

一、言論

【国民的言論の時代】 介石が経済社会構想についての言論を活発に行ったのは、明治六年頃からその没年にかけてである。この時期は、周知のように、維新政府が、断髪廢刀令明治四年（一八七二）一、徴兵令明治五年（一八七二）一、学制同、改暦同、地租改正明治六年（一八七三）一、秩禄処分明治五年検討開始、九年家禄支給全廢、鉄道明治五年一電信明治二年一開設などの近代化策を矢継ぎ早に実施し、その近代化策をめぐって政権内部の対立が深まり、農民の激しい抵抗や士族の反乱が頻発し、国民の参政権や自治を求める自由民権運動が全国に広まった時代である。また、対外的に見れば、日本経済が、不平等条約によって関税自主権を失い、欧米先進資本主義国の商品・資本が流入し、外国資本への隷属状態に陥る危険にさらされていた時期である。そして、こうした葛藤、国民運動、対外的危機を経て、上からの近代国家建設の方向が次第に明確になっていく時代である。

この時期はまた、日本に始めて出現した国民的言論の時代であった。国民的言論の媒体の一は、この時期特有の建白・建言である。二は、新聞、雑誌などの定期的ないし逐次刊行物および書籍といった印刷物である。三は、各種の演説会である。さらに、電信や郵便も言論の媒体として挙げることができるかもしれないが、ここでは省く。谷川穰は、介石がこれら三つの言論媒体を旺盛に利用したことを、丹念に調べ上げている（谷川、二〇〇二）。

【建白】 明治初年の言論媒体の一として、建白・建言を挙げることに

には違和感があるかもしれない。岩波から出されている『日本近代思想体系』第十一巻の『言論とメディア』（松本・山室、一九九六）も、言論の媒体として、新聞・雑誌・書籍と演説とを挙げているが、建白・建言を取り上げていない。しかし、『日本近代思想体系』自体、全巻にわたって種々の建白を資料として掲載し、利用している。そのことが示すように、建白・建言は明治初年の重要な言論媒体であったと思われる。

すでに慶応三年末の「王政復古の沙汰書」は、「旧弊御一洗二付、言語之道被洞開候間、見込有之向ハ、不拘貴賤無忌憚可致建言」と、新政権への建白・建言を人々に広く奨励している（遠山、一九九六、四頁）。国民の側も、士族だけでなく、農工商の一般民衆を含め、それに応えている。とりわけ近代化をめぐる対立、問題が深まる明治七年には、板垣退助らの「民選議院ヲ建ル之議」を始め、断髪、学制、大教院・教導職、改暦、地租や地券、徴兵令、華士族の家禄、貨幣制度、米価、征韓論、佐賀の乱、台湾出兵など種々さまざまな問題について、『明治建白書集成』に収録されているだけでも、五四五通の建白書が出されている。中央政府の官員ならまだしも、地方在住の者が建白を出す場合、東京までおもむき、その受理・不受理などの回答を得るため十日、二十日と滞留しなければならなかったと言う。国会も開設されていないこの時期に、言論をもって国政に「参加」する道が不完全ではあるが開かれていたのである（牧原、一九九〇参照）。

佐田介石は、頻繁に建白を行った一人である。『等象斎介石上人略伝』には、「天朝并に幕府に建言すること三十有余度、…幕府大政を返上して皇政に復せし已来、建白することも亦三十有余度」「五丁表」とある。『明治建白書集成』には、介石の建白のうち、「富国議」（明治六年一月、『集成』第二巻）、「建白「清国不可討之議」」、「建白「二十三題の議・桑茶論」」（以上、明治七年九月、『集成』第三巻）、「建白「地動説疑問の議・

附『星学疑問』(明治七年十二月、『集成』第四卷)、「耶蘇建白」(明治八年一月、『集成』第四卷)、「建白『聖徳太子追賞ノ議』」(明治八年、『集成』第五卷)が収められている。『集成』には収められていないが、介石は、仏教の国益を説いた「諸宗寺院連名建白」(明治八年)や、三条実美、木戸孝允などに直接宛てた建白も書いていると言う。

【新聞、雑誌、書籍】次に、新聞、雑誌、書籍などの言論媒体であるが、日本における定期刊行の近代的な新聞、また逐次的な雑誌も、明治初年のこの時期に創刊されるようになる。介石も、雑誌を創刊あるいは編集している。介石は、編集に携わった『世益新聞』(第一号明治八年「第九号明治九年」と創刊した『掌珍新論』(第一号、二号明治九年)には、天文地理説や経済論、護法論などを載せており、介石創刊の『栽培経済問答新誌』(第一号明治十四年「第四十号明治十五年」では、経済を論じ、維新政府の近代化策を批判している。さらに、介石は、『東京日々新聞』や明治仏教界共同の雑誌『明教新誌』に石油ランプを排斥する「ランプ亡国の戒め」(第一〇一号明治十三年七月十八日)を寄稿し、『明教新誌』第六九四号明治十一年九月十二日「から第七六二号明治十二年二月四日」にかけて近代科学に寛容な僧侶と誌上論争を行っている。また、日本の近代化に深く関った米国人宣教師フルベッキが企画した「海外交通ハ果シテ利益アル乎将弊害アル乎トノ二問題」についての懸賞論文募集に、介石も応じている。没後に出版された介石の応募論文『點取交通論』に付された緒言によれば、「佐田介石先生快筆ヲ揮テ交通ノ弊害ヲ極論セラレ、二等賞ヲ得ラレタリ。而シテ他ニ一等賞ヲ得タル者ナシト云フ。載テ明治十年八月ノ日々新聞『東京日々新聞』ニアリ」という。さらに介石は、天文地理に関する多くの書を著し、その経済説の名著として、『栽培経済論初編』上下二巻(明治十一年)、『同後編』上下二巻

(明治十二年)がある。

【演説】僧侶の法話や説教、また講談なども演説の一種であろう。しかし、宗教的動機や楽しみのためではなく、政治問題や社会問題について意見を述べ、相互理解を深め、集団的な意思形成を図ることを目的として、演説が行われるようになるのは、明治初年のこの時期からである。福沢諭吉の三田演説会が有名であるが、「三田演説会日記」第二号の明治十二年二月二十八日開催の演説会の記録に、「富国三法 外員 佐田介石」とある(松本・山室、一九九六、二九九頁)。谷川の緻密な調査によれば、介石は、明治十一年から十五年に病没するまでの五年間に、新聞雑誌などの記事に確認されるだけで、三都を中心に七十ヶ所以上の地域で演説を行っている。一ヶ所で数日あるいは一月近く演説している事例も多いから、大変な演説回数である。演説会場は、浅草寺の伝法院、長野・善光寺、京都・大谷派上等普通教校、大阪・四天王寺など、天台・浄土系を始め各宗派の寺院が多いが、介石を支持する商家や小学校、手芸学校、料亭、そして三田演説館で行われている(谷川、二〇〇二、八三―七頁)。

【介石の言論は、様式においても、過渡的】こうした言論様式からも言えることだが、介石の言論は、伝統から近代への過渡的なものであったと思われる。建白は、広く国民に「貴賤に拘らず、忌憚無く」国政全般について建言することが奨励されているという点では、近代的である。しかし、やはり建白は、国会が開設されるまでの過渡的な、前近代性を合わせ持つ言論の様式ではない。

演説についても、介石の演説はその多くが寺院施設で行われているという点からすれば、僧侶の法話や説教といった伝統的な演説と変わると

ころがない。しかし、その内容は、僧侶の説法ではなく、地は平らであるか球であるか、静であるか動であるかという天文説であり、富国論であり、ランプや蝙蝠傘などの舶来品を排斥しようという訴えであった。明六社創立者の一人でキリスト者でもあった中村正直は、介石の『栽培経済論初篇』や『點取交通論』に「序」を書いている。そして、経を誦えたり仏を念じたりせず、外国貿易によって窮乏に陥った民衆をいかにして救うかを説く介石こそ「真ノ佛者也」と厚い共感のことばを寄せている（『點取交通論』序）。介石の演説は、伝統的な説法とはおよそ異なるものであったのである。さらに、『略伝』によれば、介石の演説を聞いた聴衆たちは、「悉皆師の説に帰嚮して国産を興し洋品を廢する社を開」（十一丁表）き、長野には憂国社、大坂には保国社、東京には觀光社、京都には六益社等々の結社が作られていった。この点においても、介石の演説は、伝統的な坊主の説法から、社会的問題について集団的な意思形成を図ることを目的とした、近代的なタイプの演説へと姿を変えていたと言える。

【主張内容も過渡的】 介石の言論が前近代から近代への過渡的な性格をもつものであったということは、言論の様式や媒体の面からだけでなく、その主張内容においても確認することができる。例えば介石の天地理説は、印度仏典の須弥山説や中国上古の蓋天説という古い伝統的世界像を主張する。しかし、介石は、西洋天文学との論争を説得的に進めるために、地動説についてはあくまで退けつつも、地球説との妥協を企てている。天地理説に関する介石の著書の一つ、『視実等象儀記初篇』には、「一名天地共和儀記」という副題が付いているが、その「共和」は、「地平家」と「地円家」との「両家ノ天地ノ論ヲシテ共和セシメ」（二十八丁表）るといふ介石の意図を表している。即ち、われわれに

とつての見え（視象）に関しては「地円家」の主張を認めなければならぬけれども、天地の姿（実象）についてはやはり「地平家」が正しいという仕方、視実両象の概念によって、地平説と地球説との両立を図ろうというのである。その両立を可能にする理論、「視実両象ノ理」（視象と実象とを媒介する一種の観測理論）に、介石天地理説の工夫がある。介石は、この「共和」を通して、現象面に限って近代天文学を自説の中に取り込もうとしている。しかし、その結果、須弥山に代えて、むしろ地球説の地軸（それは、地動説の自転軸と一致するが）を天文現象についての自らの説明の枠組として取り入れてしまっている。このように、介石が企てた「共和」は、伝統的な天文観から近代天文学への過渡を成すのである。佐田介石のものを含む江戸後期明治初年の仏教天文学については、岡田正彦、内海一隆らの先行研究がある（岡田、二〇〇二他、内海、二〇〇六）。合わせて、拙論（梅林、二〇〇七a・梅林、二〇〇七b）も参照いただきたい。

二、社会経済論

【介石は、同時代の民衆の問題と向き合う】 経済社会思想についても、介石の主張内容は、前近代的側面と近代的側面の両面を含み、前者から後者への過渡的な性格を持つと見ることができよう。

まず、介石の社会経済論が扱っている問題が、前近代から近代への過渡期の問題であったということが挙げられる。それは、介石が同時代の問題と真剣に向き合い、またその時代が、近代への過渡の時代であったわけだから、当然のことである。

介石の明治七年の「建白」〔二十三題ノ議・桑茶論〕（以下、「建白二十三題」と略す）は、その冒頭で、「…戊辰以来諸縣の暴動殆大小百ヶ処…」

ソノ甚キニ至リテハ県庁ヲ焚キ県官ヲ殺ス。筑前ノ暴動ハ刑ヲ蒙ルモノ十余万ニ及ヘリ」(九三頁)と、維新政府の近代化策に反対して全国に頻発した民衆の激しい抵抗に触れている。「筑前ノ暴動」とは、明治六年六月福岡県嘉麻・穂波二郡で、早魃による米の凶作と一儲けを企む米相場師への怒りに端を発し、爆発的に県下に広がり、電信柱、電信局、小学校などの文明施設の打ち壊し、福岡県庁への乱入、官員の自刃・殺害、熊本鎮台兵による鎮圧という不幸な事態に至った「筑前竹槍一揆」と呼ばれる騒擾である。

「建白二十三題」は、続けて、「民ノ怨ムル怒レル果シテソノ本アリ」と、民衆の怒りに正当な理由があると言う。そして、それは国家と国民の窮乏に発し、さらに国家国民の窮乏の本として、「百般旧事ヲ廢シテ、猶未ダ之ニ換ルヘキ新法立ザルニ在リ」ということ、また新法が示されてもそれは「皇国ノ事ヲ以テ西洋法ニ易ヘ」るものでしかないことの二点を挙げて「同前」。つまり、介石は、民衆の怒り・窮乏の本として、伝統から近代への過渡を切り開く「新法」が示されていず、また新法があってもそれは西洋近代の輸入でしかないと言うのである。「建白二十三題」は、維新政権の近代化策を、外国交易、改暦、断髪、学制、徴兵令、煉瓦石、鉄道、…と次々に批判していく。

【学制について】 学制についての介石の批判を見てみよう。学制は、国民に小学校就学を強制しながら費用負担を「受益者」や地域住民に求めるという矛盾を抱えていた。さらに、民衆に従来のライフサイクルの変更に迫るものでもあった。それらの点から、学制は民衆の激しい抵抗に遭っている(森川、一九八四、三一七―二九頁参照)。介石の「建白二十三題」は、教育内容について西洋の学問を教えることを批判し、制度面において、就学の強制性と民衆負担の矛盾に触れて、「小学校二入り

難き難渋の旨歎き出候へハ、身代ハ潰れても小学校へハ是非出ず様との布告の処も之有り哉ニも承り及ふ。右様無理なる御仕法ハ是れ民を育ツル学校ニ非ず、民を倒すの学校たるへし。処々の農民一揆も皆小学校を嫌ふより出ツ。一日も早く御改正に相成り度」と、民衆に共感し、新政府に厳しい意見を述べている。さらに、徴兵令にも触れて、「士族を闊て、農工商の三民を…小学中学大学ニ駆り入れ、引続き兵隊に引入れるならば、「己れの家業の職を稽古すへき時ニ」それができず、「終ニ農工商の職業を勤むるもの一人も無き事ニ可相成。」(九三九頁)と言う。介石の批判は士と農工商との身分差別を容認し、専ら伝統的な生活を擁護するものである。しかし、学制や徴兵令は、民衆の伝統的な生活のサイクルを壊してしまう恐れがあるという介石の指摘は、間違っていないであろう。

【介石の経済説の三つの特徴】 佐田介石の経済説についての先行研究としては、浅野、一九三四、(本庄、一九四二)を始め、新しい研究としては相原、一九八四、(谷川、二〇〇二)などがある。介石の経済説は三つの特徴を持つ。一つは、舶来品排斥運動に象徴されるように、グローバル経済を否定して、日本一国のローカル経済において富国を考えると、う特徴である。二には、「国ヲ富スノ順序ハ消費ヲ先キニ製造ヲ後ニスベシ」(『栽培経済論初編』十二節)と言っているように、生産ではなく、消費を経済の要とするという特徴である。三には、介石がその経済論を自ら「栽培経済論」と命名していることから明らかに、農業をモデルとし、自然を育て人を育てる経済を主張するという特徴である。

これら三つの特徴は相互に関連し、どの一つの特徴から入っても他の二つの特徴を見ていくことができるが、論者により三点に対する着目の仕方が異なる。介石経済説の対外的要因を重視する論者、例えば相原、

一九八四や吉野、一九二九は、一番目の特徴を重視している。しかし、以下では、生産ではなく消費を経済の要とするという第二の特徴を中心に見ていくことにする。というのも、消費と生産、あるいは生産と消費の関係をいかに構築するかという問題は、伝統的な経済社会から近代的な経済社会への移行に際して問われるべき重要な問題の一つであるように思われるからである。

【消費と生産】 実際、明治初年のこの時期、幾人かの思想家が、伝統から近代への移行に関わって、生産と消費との関係に言及している。福沢諭吉は、『文明論之概略』（明治八年）において、また『民間経済録二編』（明治十三年）において、「生産と消費」にほぼ対応する用語として「積と散」ないし「集と散」を使いながら、生産と消費との関係に言及している。また、徳富蘇峰の『将来之日本』（明治十九年）も、全体として武備主義に対して生産主義を主張するわけだから、また武備主義は消費主義の極端な場合であるから、生産と消費の関係を論じているのである。特にその「過去の日本」の二章では、生産と消費との関係が直接語られている。

ところで、生産と消費は、人間社会においては必ずしも一体ではなく、異なる時間においてなされ、空間的にも離れた場所でなされる。人と人との関係としても、ある人が生産者である関係においては他の人が消費者であり、ある人が消費者である関係においては他の人が生産者である。また、人と自然との関係としても、生産においても消費においても、人と自然とは互いに疎外しあう関係に立つことがある。しかし、それでも生産と消費は、コインの表裏のように分離することができない。生産が消費を可能にし、消費が生産を可能にするという意味においても、また、物品の消費は人間力の生産であり、物品の生産は人間力の消費であると

いう意味においてもそうである。

介石がその言論を広めた明治初年の時期の日本は、生産と消費とのこうした時間的、空間的關係、人と人との関係、人と自然との関係の総体を、伝統的なものから近代的なものへと如何に再構築していくべきかという大きな問題に直面していた。介石の経済説も、そうした問題状況における発言の一つである。介石が、あくまで伝統的な生活世界を擁護しようとしていることは否定できない。しかし介石が生産と消費との関係の総体をいかに築くべきかという問題に取り組んでいるということ自体に、介石の経済論の近代的性格を見ることができるのである。

【外国交易の是非、都市と農村の關係】 開港と外国交易の是非をめぐる問題も、消費と生産との関係を、空間的に、グローバルな世界に展開していくのがいいか、あくまで日本一国に限るべきであるかという問題とみなすことができる。介石はもちろん、生産と消費とは日本一国のなかで関係付けられるべきであると主張する。その根拠として、西洋と日本とは、文化、気候・風土、国民性などの違いから、経済の成り立ちが根本的に異なることを挙げる。そして、西洋が、国内で大量生産を興しグローバル市場を通して生産物の消費の道を広げるのに対し、狭い国内市場しか持たない日本は、国内の消費をまず拡大し、それに応じて生産を拡大するという仕組にならざるを得ないと言う。この違いを無視して、グローバルな世界で西洋と競争しても、決してうまく行くことはないと指摘する。

介石は、日本国内における消費と生産の空間的關係についても、輻湊する消費地である東京、西京、大阪の三都を中心に置き、そこから中間の消費地や流通都市（城市、駅市、港市）を通じて、周辺の農・百工の生産地へといたる空間モデルを描いている（栽培経済論後編上、十五―七丁

裏」。都市を消費地として中心に据え、生産地である農村を周辺に配する介石の空間モデルは、消費優先の考えからの帰結であるが、やはり江戸時代の経済モデルであろう。介石は、富国を考え、経済発展を考えているという点では近代的であるけれども、あくまで伝統的な空間秩序を重視するのである。

【秩禄処分】 明治初年においては、生産と消費との四つの関係のうち、人と人との関係という側面は、他の関係に比べてはるかに厳しい論争問題であった。つまり、専ら消費を享受している武士以上の身分をいかにすべきか、士農工商といった封建的な身分制度をいかにするか、西南戦争の一因ともなった華士族の秩禄処分と帰農・帰商をめぐる問題であった。

介石の明治七年の「建白二十三題」は、「国ヲ富マスノ道ハ、消費ノ法ヲ広クスルニ如クハナシ。消費ノ法狭ケレハ、随テ製造ノ道モ随テ狭ク塞ガリ、消費ノ道ヲ広クスレハ、制作ノ道モ亦随テ広ク通ス」(九二三頁)と、その経済原則を述べる。消費の道の「広・狭」は、消費者が「多い・少ない」を意味し、製造の道の「広・狭」は、生産者が「多い・少ない」を意味する。例えば櫛簪の作者は一人で一日に十五品製造するとすれば一年で五千四百品製造するが、消費者一人は一年に一品あれば足りる。他の物品についても生産者と消費者の関係はこれと同じであるから、一般に生産者よりも消費者が百倍千倍も多くなければならない。従って、とりわけ外国に消費地を求めることができない日本においては、まず消費の道を拡げ消費者を増やさなければならぬというのである。

「建白二十三題」は、「然ニ戊辰以来ノ景況、天下ノ人ヲシテ悉ク作者タラ令メントシ玉フ勢ニ似タリ。…是レ恐クハ大害ヲ醸スヘシ」(九二

四頁)と、明治政府の士族帰農・帰商の政策を批判して、それは消費者を減じ生産者を増やす政策であり、経済の原則に反するものであると指摘している。さらに、「建白二十三題」は、旧藩士の帰農、帰商は必ず失敗し、天下の大乱を招くと推測している。それでは、「旧藩士進退」をいかにすべきかという点、介石は、消費者としての士族の耐用を指摘して、「士族に禄を復し玉ふ」ことが、「却て天朝の御大益のみならず、天下農民の幸延て工商迄に及ぶ」(九六七頁)とする。

このように、消費を最重視する介石の経済原則は、人と人との関係という側面においては、専ら消費生活を享受する者としての士族に富国の耐用を期待するという方向に展開していく。さらに、介石は、「タトヘハ天子ハ一人ニテ万人ノ用ユヘキ品ヲ兼併シテ用キ玉ヒ、或ハ鴻ノ池加島屋ノ如キハ一人ニテ千人ノ用ユヘキ品ヲ兼併シテ用ル類ヒ」を、「兼併消費ノ法」と呼んで、一人で百人分、千人分、万人分の消費を享受する「兼併消費」の人々に、富国の耐用を期待している諸寺院連名建白書続編、十一丁。

介石の「国ヲ富スノ順序ハ消費ヲ先キニ製造ヲ後ニ」すべきだという主張と対照をなすのは、福沢諭吉や徳富蘇峰の考えである。福沢諭吉は、『文明論之概略』の中で、生産と消費は一体であるべきであるという視点からの経済論を述べている。福沢の考えは、「蓄積費散即ち生産と消費」の二カ条は、何れを術…何れを目的と為すべからず、何れを前…何れを後と為すべからず。…富国の基はただこの蓄積と費散とを盛大にするにあるのみ」(二四八頁)というものである。福沢は、社会のなかに専ら消費を享受する人と専ら生産に従事する人とが存在することを必ずしも否定してはいないが、消費の階級が治者となり、生産の階級が被治者となつて、治者の階級は生産が何であるかを知らずに専ら浪費し、生産の階級は消費することを知らずにただ吝嗇に陥っていると、旧社会の状

態を批判している。そして、生産と消費は、「何れを前…何れを後と為すべから」ざるものであるから、消費者と生産者とは同一の心を以つて国家社会の経営に当たらなければならないと考えている。

徳富蘇峰『将来之日本』の意見は、より明快である。「武備の世界」には「二種の階級ありて一はただ消費者…一はただ生産者…」。消費者は徹頭徹尾、ただ愉快に安楽に貨物を再生の見込みなき地に向つて消費するのみ…、生産者は徹頭徹尾…終生骨を折り、汗を流して生産の業に従事するのみ。」「一五〇頁」と、江戸時代までの武家支配の社会を批判し、「経済世界自然分配の法則に従えば…、何人…も生産者…は必ずまた消費者…、消費者…は…また生産者…」。その消費する額の多少は…その生産の多少に平均し、…消費…多き者は…生産…多く、生産…少なき者は…消費…少なく…」と、全人民が「皆一の生産者…消費者」である生産主義の社会の到来を訴えている「二五一頁」。

福沢や蘇峰の意見と比較するとき、士族を消費を享受する階層として残し、士族や「兼併消費」の人々の消費に、富国の大用を期待する介石の消費富国論には、前近代への保守主義的郷愁を指摘せざるを得ない。しかし、「士族に禄を復し」、また「兼併消費」の人々の消費力を評価する介石の意見は、必ずしも士族等の利益を考えてのことではないであろう。むしろ、「兼併消費」の人々が消費を盛んにすれば、その分金貨、物品の流通が盛んになり、また生産が増大することにもなるので、「天下農民の幸延て工商迄に及ぶ」と考えているのである。そのように、農民を始め民衆の生活が、介石の視野に入っているのである。また、士族を専ら消費階層として位置づけ、鴻ノ池加島屋などの豪商、「兼併消費」の人々に、一人で百人分、千人分、万人分の消費を期待する介石の考えは、反「生産主義」的であり、浅野が指摘するように「反資本主義的」である「浅野、一九三四、二九頁」。というのも、介石の消費重視の考えを

実践すると、生産のための資本蓄積が不可能となるからである。介石の消費経済説は、反「生産主義」的で「反資本主義的」という点において、一方では保守的でありながら、同時に近代批判という今日的な意義をも合わせ持っているように思われるのである。

【自由時間論】 消費を重視する介石は、「遊芸者ノ消費ノ功モ製造人ノ功ヨリ一分一厘モ劣ラサルヘシ」と、消費の経済効果を指摘し、「遊楽」と消費生活の重要さを言い、素朴ではあるが一種の自由時間論を説いている。それによれば、遊びには、「放蕩ノ遊ビ」「養育ノ遊ビ」「励マン為ノ遊ビ」「業余ノ遊ビ」の四種がある。「放蕩ノ遊ビ」はもちろん「戒シムヘキコト」である。だが、「養育ノ遊ビ」は、幼童を育て老を養う（幼年、老年期のいわば人生の自由時間の）遊びであつて、玩具や茶道具やお菓子などその経済効果は大きいと言ふ。「励マン為ノ遊ビ」とは、勤労者の休日の遊びであり、「百工ナドノ職人ハソノ休日ニ至テ遊園劇場ノ遊ビガ却テ平日ノ職業ヲ励マスルトコロノ目的トナル」と言ふ。「業余ノ遊ビ」とは、「高貴大富ノ家族」の閑暇の遊びである。介石は、江戸町民の遊楽の場所としての浅草のにぎわいを思い、また両国回向院嵐山吉野山の桜を「遊観スル人衰ヘタル」を歎いている。そして、勤勉と儉約を説く道徳に対しては、明治初年維新政府が浅草寺に「浅草公園」を整備したことを挙げて、「何故ニ官ニ於テ遊園地ヤ劇場ナドノ遊処ヲ立テ置カレ且ツ遊芸人ヲ許シオキ玉ヘルヤ」と切り返している「栽培経済論後編上、三十五―八丁」。

まとめに代えて

近代日本は、勤勉と儉約の道を突き進み、労働時間が延長し、過労死

などの問題を生むことになるが、介石の「自由時間論」は、江戸の遊びの文化をそれに対置しているのである。この点においても、介石の主張は、保守的であり、同時にそれだけでなく、近代日本が実際にたどった道とは異なる要素を暗示している。

このように、介石の言論は、その様式・媒体においても、また主張内容においても、前近代と近代との過渡的な性格を持ち、またその近代批判には、単なる前近代への回帰という側面とともに、近代を超えた今日的意義を認めうる一面を持つていたとすることができる。

参考文献

- 浅野研眞、一九三四『明治初年の愛国僧 佐田介石』、東方書院、昭和九年。
- 梅林誠爾、二〇〇七a・「佐田介石仏教天文地理説の葛藤」、『熊本県立大学文学部紀要』、第十三巻、三一―五六頁。
- 梅林誠爾、二〇〇七b・「佐田介石と近代世界」、熊本近代史研究会『近代熊本』第三号、一―二四頁。
- 海野一隆、二〇〇六・『日本人の大地像——西洋地球説の受容をめぐって——』、大修館書店。
- 岡田正彦、二〇〇一・「忘れられた『仏教天文学』——梵曆運動と『近代』——」、『宗教と社会』第七巻、七一―九〇頁。
- 柏原祐泉、一九八四・「佐田介石の仏教経済論——近代における封建仏教の倒錯——」、『仏教史学研究』第二七巻第一号。
- 佐田介石、一八七四・「建白」二十三題ノ議・桑茶論」明治七年（色川大吉・我部政男監修、牧原憲夫編、一九八八・『明治建白書集成』第三巻、筑摩書房、所収）。
- 佐田介石、一八七五―六・『世益新聞』、第一号「明治八年」、第九号「明治九年」。
- 佐田介石、一八七六・「諸寺院連名建白書続編」『世益新聞』第六号、明治九年。
- 佐田介石、一八七六・『掌珍新論』、第一号、二号「明治九年」。
- 佐田介石、一八七七・「視実等象儀記初篇 一名天地共和儀記」、明治十年八月。
- 佐田介石、一八七八・「栽培経済論初篇」上下二冊、明治十一年三月。
- 佐田介石、一八七八―九・「因幡善瑞との天文地理学に関する誌上論争（『明教新誌』第六九四号「明治十一年九月十二日」から第七六二号「明治十二年二月四日」）。
- 佐田介石、一八七九・「栽培経済論後篇」上下二冊、明治十二年九月。
- 佐田介石、一八八〇・「ランプ亡国の戒め」『明教新誌』第一〇―二一、明治十三年七月十八日号。
- 佐田介石、一八八一―二・「栽培経済問答新誌」、第一号「明治十四年」、第四十号「明治十五年」。
- 佐田介石、一八八三・「点取交通論」、明治十六年。
- 谷川穰、二〇〇二・「『奇人』佐田介石の近代」、『人文学報』第八七号。
- 遠山茂樹校注、一九九六・『日本近代思想体系？・天皇と華族』岩波書店。
- 徳富蘇峰、一八八六・『将来の日本』明治十九年（中央公論『日本の名著40 徳富蘇峰・山路愛山』所収）。
- 仁藤巨寛、一八八三・『等象斎介石上人略伝』、耕文社、明治十六年。
- 福沢諭吉、一八七五・『文明論之概略』、明治八年（岩波文庫版）。
- 福沢諭吉、一八八〇・『民間経済録二編』、明治十三年（岩波全集版、第四巻、三四五―九頁）。
- 本庄栄治郎、一九四一・『佐田介石社会経済論』、日本評論社。
- 牧原憲夫、一九九〇・『明治七年の大論争——建白書から見た近代国家と民衆』日本経済評論社。
- 松本三之介・山室信一校注、一九九六・『日本近代思想体系11・言論とメディア』岩波書店。
- 森川輝紀、一九八四・「『学制』の民衆的受容と拒否」（『講座日本教育史2 近世Ⅰ／近世Ⅱ・近代Ⅰ』第一法規出版、所収）。
- 吉野作造、一九二九・「栽培経済論解題」（『明治文化全集第十六巻思想篇』復刻版、一九九二、日本評論社所収）。

（熊本県立大学文学部教授）